

2001年度

ムーブメント教育・療法夏期セミナー

自立活動に生かすムーブメント教育

< 横浜会場 >

期 日：2001年8月25日(土)～8月26日(日)

会 場：横浜ラポール ラポール1F
ラポールシアター／サブアリーナ

主 催：日本ムーブメント教育・療法協会

共 催：横浜市心身障害児者を守る会連盟

横浜会場

自立活動に生かすムーブメント教育

8月25日(土)		横浜ラポールシアター／サブアリーナ
10:00	<受付>	
10:30	<実技>	
11:30	動きをとおして子どもたちに喜びを ー守る会連盟の子どもたちと共にー	是枝喜代治ほか
11:30	<解説>	
12:00	実技指導のポイント	是枝喜代治
<昼食>		
13:00	<実技>	
14:00	算数・国語ムーブメントの実際	長谷川英子
14:00	<講演>	
15:00	養護学校における個別指導計画	仁科 由美
15:20	<講演・実技>	
16:40	知覚学習パイプによる重度重複障害児から LDまでの支援	小林 芳文 飯村 敦子

8月26日(日)		横浜ラポールシアター
9:45	<受付>	
10:00	<講演>	
11:00	ムーブメント教育による自立活動の新しい展開	小林 芳文
11:00	<講演・実技>	
12:00	ムーブメント教育による前教科学習	當島 茂登
<昼食>		
13:00	<実践報告> 自立活動の計画と展開 ・認知発達を促す自立活動の展開	庄司 喜昭
14:00	・コミュニケーションを育てる自立活動の展開	国広 松代
14:00	<講演>	
15:00	障害児・者のプールにおける実践と効果	荒井 正人
15:20	<実技>	
16:20	バイオリンによる音楽ムーブメントの展開	猪子秀太郎

8/25 10:30~11:30

＜実 技＞

動きを通して子どもたちに喜びを 一守る会の子どもたちと一緒に一

国立特殊教育総合研究所 主任研究官
是枝喜代治 他

1. 感覚運動による動きづくりの支援

- ・姿勢、移動、操作など、動きの基本を育てる
- ・ダイナミックな揺れの体験など、遊具を活用して子どもの諸感覚に動きかける（トランポリン、スクーターボード、シーツブランコ、パラシュート等の感覚運動遊具の活動）

2. 知的発達の基盤となる身体意識能力、知覚能力等の発達支援

- ・身体像、身体図式、身体概念を育てる
- ・身体意識と関連の深い時間や空間の概念を育てる（高い、低い、大きい、小さい、速い、ゆっくり、など）
- ・知覚－運動プログラムにより、視覚－運動、聴覚－運動などの連合能力（結び付ける力）を育てる（色、形、数、ことばなど）

3. 集団活動を通したコミュニケーションや社会性の支援

- ・集団活動を通して、自己意識や他者意識を育てる
- ・動きによる活動を通して、仲間との関わりを深める

4. 多様な環境設定により自主性や自発性を支援する

- ・子どもたちが自ら動きたくなるような環境を工夫する
- ・子どもの興味や関心を把握し、環境設定に役立てる

ムーブメント活動での主なねらいと活動

1. ねらい

- ・さまざまな遊具を活用して、感覚運動機能、身体意識能力、知覚運動能力の発達を促す。
- ・楽しい雰囲気の中で、動きの拡大を図る。
- ・集団活動を通して、人やものとの関わりを深め、社会性やコミュニケーション能力の形成を図る。

2. 活動内容

活 動	内 容 ・ 方 法	達成課題	配 慮 点
フリームーブメント (20分程度)	意図的に遊具を配置する ■前庭感覚系遊具 (スクーターボード、ユランコ、トランポリン等) ■操作性遊具 (ビーンズバッグ、フリスビー、フープ、ボール、リボン、ロープ等) ■その他の遊具	自発性 創造性 社会性	安全面を配慮しながら子どもの動きや、興味・関心等を観察する
課題ムーブメント ・集合、挨拶 ■ロープムーブメント	課題別のプログラム (集団でのプログラム) ・ロープで円形を組む ・音楽に合わせてロープを動かす(右・左・上・下など) ・ロープを持って	聴覚運動 連合 社会性	個々人の発達段階や課題への理解を把握しながら、適宜援助する
■ムーブメント発表会	・グループまたは個別で、指示された課題を発表する ・スクーターボード、風船等	自主性 自発性	全員が参加できるように工夫する 子どもの自主性・自発性、挑戦する気持ちを大切にする
■パラシュートムーブメント	一人ずつパラシュートの上に乗る、大きく上下に揺らす	前庭感覚 刺激	子どもの表情等を見ながら、揺れの強さを考える

お願い：参加者も可能な範囲で、子どもたちに関わってください。当日の子どもたちの人数や状態等により、プログラムは多少変更するかもしれません。

実技指導のポイント

1. ムーブメント活動における基本的な考え方

- ・楽しい雰囲気の中で活動する
- ・生活年齢や障害特性、個人差に配慮する
- ・子どもの興味・関心を引き出す
- ・子どもの得意な面を指導に生かす
- ・子どもが自ら動きたくなるような環境設定を工夫する
- ・さまざまなムーブメント遊具を活用する
- ・集団活動を基本とする
- ・子どもの主体性を重視して、出来るかぎり競争させることは避ける

2. 子どもの実態を適切に捉える

■フリームーブメントの有効性

フリームーブメントは、子どもがどのような遊具に関心があるか、その遊具を使用して、どのように工夫して遊ぶかなどを観察し、指導プログラムを計画・展開していく上で重要である。支援する側としては、子どもの発達段階等を把握して、簡単なモデルを示したり、自主性を大切にしながら適宜、補助するなどの工夫も大切である。

■個々人の実態の把握

それぞれの子どもに適した指導プログラムを展開させる意味でも、個々人の運動の育ちを把握することは大切である。

ムーブメント教育を展開する上で、以下のアセスメントが参考となる。

・MEPA（ムーブメント教育プログラムアセスメント）

感覚運動（姿勢、移動、操作）、言語（受容、表出）、社会性の3領域で構成され、プロフィール表により、発達段階が0歳～6歳までの子どもの全体的な育ちを確認することができる。具体的なムーブメント教育プログラムを展開する場合は、「発達指導ステップガイド」等を参考に、個々の実態に応じた指導内容を組み立てることができる。

- ・MEPA-II（ムーブメント教育プログラムアセスメント-II）

MEPAと同様に、発達段階が0歳～1歳6ヶ月までの子どもの全体的な育ちを確認することができる。感覚運動、コミュニケーションの2領域で構成され、乳幼児や障害の重度な子どもたちの発達を細かく評価する。

- ・MSTB（ムーブメント・スキルテストバッテリー）

手や指先の細かな動き（微細運動）を評価するA型検査（4課題）と全身の動き（粗大運動）を評価するB型検査（8課題）の計12課題で構成されている。

3歳～12歳までの子どもの運動能力（身体適性）を評価する。

- ・BCT（身体協応性テスト）

後ろ歩き、横とび、横移動の3課題から構成され、4歳～12歳までの子どもの全身性の身体協応能力を評価する。

- ・その他、運動や動作に関わる子どもの日常生活行動の観察も、有効な指標となる。

＜実 技＞

8/25 13:00～14:00

算数・国語ムーブメントの実際

横浜国立大学教育人間科学部附属養護学校 小学部教諭
長谷川英子

本校の小学部では、個別の国語・算数と平行して集団の算数・国語ムーブメントを行っています。子どもたちは楽しみながら色々な物を操作し、様々な発見をしたり、問題解決をしています。今回は、小学部の子どもたちが大好きなボックスとウレタンスティックを使って、会場の皆さんと一緒にムーブメントの実技を行います。

ボックスムーブメント

課題のねらい	学 習 活 動
■方向性	▼ビッグボックスダンス ・「右」「前」の指示を聞いて動く
■創造性 ■社会性	▼フリームーブメント ・フロアーいっぱいにウレタンスティックを広げ自由に遊ぶ ・楽しい遊びを発表する
■長さの組み合わせ	▼3個の箱を指定された高さに積み上げる
■容積・体積	▼小さい箱をたくさん入れる ・できるだけたくさんの箱の中に入れる ・いくつ入っていたかを並べて比較する (長さや数で比較)
■箱の縦・横・高さ の違いに気づく	▼箱を高く積み上げる (高さで比較)
■身体意識 ■社会性	▼積み上げたボックスの周りをグループ毎に手をつないで歩く
■表面積	▼大きさを考え順番に箱の中に入れる

ウレタンスティックムーブメント

課題のねらい	学 習 活 動
■創造性 ■社会性 ■衝突回避 ■共同空間 ■他者意識 ■身体意識 ■方向性 ■方向性 ■共同空間 ■他者意識 ■見通し (空間位置関係) ■動的バランス ■立体構成 ■他者意識 ■身体意識 ■物的バランス ■他者意識 ■共同空間	▼フリームーブメント ・フロアーいっぱいにウレタンスティックを広げ自由に遊ぶ ・楽しい遊びを発表する。友だちの発表した遊びをやってみる。 ▼二人組でウレタンスティックを持ってぶつからないように歩く、またぐ、くぐる。 ▼隣のウレタンへ移動する。 ・合図に合わせて時計周りに移動し、隣のウレタンスティックを持つ。 ▼前方のウレタンスティックに移動する。 ・前方の少し離れた友だちと位置変換し、ウレタンスティックを持つ。 ▼迷路 ・ウレタンスティックで作られた迷路を落ちないように終点まで歩く。 ▼見本や図を見て構成する。 ・井桁や三角形の塔を構成する。 ・できあがった塔の中に入る。出る。 ▼塔を持ち上げ移動する。

<講演>

8/25 14:20~15:00

養護学校における個別指導計画

横浜国立大学教育人間科学部附属養護学校 小学部教諭
仁科 由美

1. 学校の概要と特徴ある教育課程について

本校は、小学部・中学部・高等部からなり、児童生徒数は79名、知的障害を持つ子ども達の学校である。開校以来20年間、一貫として「賢く豊かに生きる」ための教育、そして個に応じた教育をすすめてきた。私たちはこれらの積み重ねをもとに、学校の役割や機能を明確にし、さらに特別な教育的ニーズをもつ子ども達の教育の内容と方法を深めていく必要性を感じ、研究をすすめてきた。本校では子ども達の認知発達を促す教育を基本においている。その中で、小学部ではムーブメント教育を取り入れた教育活動を展開してきた。ここで紹介するのは、教科のねらいを取り入れたムーブメントである。その前に、本校の概略を説明し、小学部におけるムーブメント教育の位置付けを明確にしておきたい。

1) 教科中心の教育課程

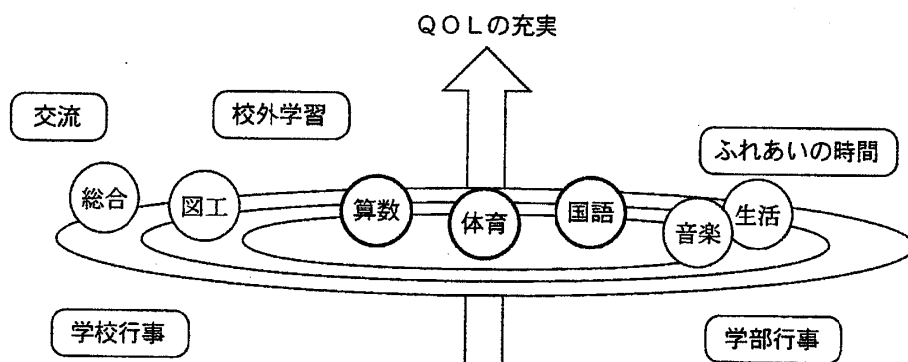
本校は教育課程の基本に教科学習を位置付けている。平成5年度にこれまでの教育活動を基本に教育課程の見直しをおこない、知的障害のある子ども達の認知発達を、系統的・計画的に促していく一つの方法として教科中心の教育課程を導入した。本校の教育課程は、子どもの生活をもとにし、教科という視点により「経験」から「概念」へ、「感性」から「知性」への道筋を用意し、QOLの充実をはかる事をめざしている。

2) 教育課程の構造化（小学部を例にとって説明）

さて、教科学習をすすめていく時、普通校の教育課程をそのまま持ってくる事は難しい。子ども達の認知発達の程度や、認知スタイルを考慮してすすめていかなければならない。また、各教科が別々に存在して学習をすすめてしまうと、子ども達自身でそれらを統合するのは難しく、日常生活の様々な場面で自分の力として使っていく事も困難な状況である。そこで、教科間に有機的な関連をもたせることで、システムとしてより有効的に機能させていこうと考えてみた。すなわち、各教科を「基礎教科」「伸展教科」「活用教科」の3つの視点により構造化して考えた。

「基礎教科」は「国語科」「算数科」「体育科」とし、基礎的な知的な発達、身体と動きの発達を支援する学習を行う。「伸展教科」は生活科（理科・社会）、図工科、音楽科とし、基礎教科で培った力をそれぞれの教科の特性を生かした学習内容・場面でつかってみると同時に、各教科の内容を学び、自分の生活の世界を広げる事をねらいとしている。「活用教科」はそれぞれの教科で培った力を、実際の場面で使ってみようとする時の試運転的な教科とし、日常生活に密着した内容で、自ら問題解決をはかることをねらいとしている。総合科を活用教科として位置付けた。

また、活用教科で発揮できなかった力は再び基礎教科で学習してみるなど、有機的な関係を持たせている。



●小学部高学年の日課

	月	火	水	木	金	土
1	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動
2	全体体育	全体体育	総合	全体体育	全体体育	総合
3	国語	算数	総合	算数	国語	総合
4	音楽	体育	総合	図工	生活	学級活動
	給食	給食	給食	給食	給食	
5	算数	ふれあい	学級活動	国語	学級活動	
6	学級活動	学級活動		学級活動		

はムーブメントを取り入れている時間

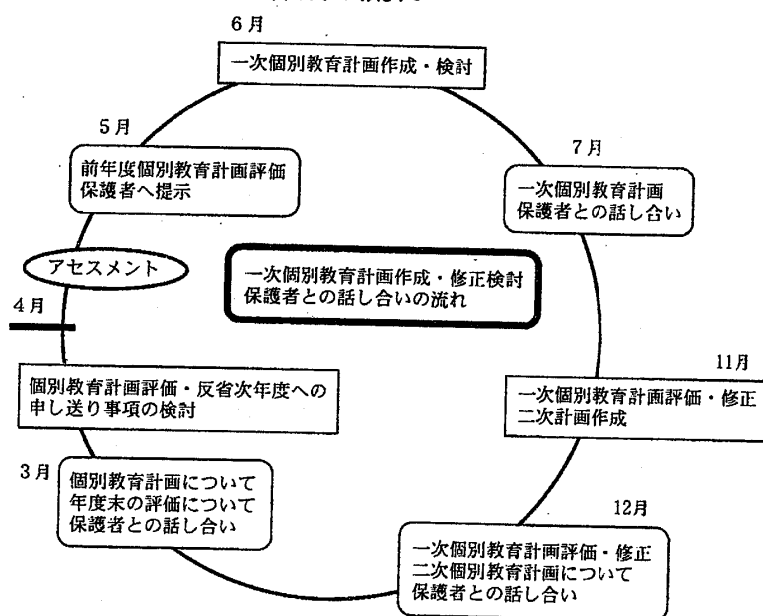
2. 本校の個別教育計画について

①個別教育計画の基本的考え方

- 児童生徒の理解
- 保護者との密接な協力
- 組織的検討
- 教育課程の検討と教科間の有機的つながり
- 各学部の実情にあった個別教育計画

②個別教育計画の概要

③個別教育計画作成の流れ



④本校の考えるQOL

情操	社会生活 への適応	職業能力
認知	本校児童 生徒の QOL	自己実現
身辺処理 生活技能	健康	余暇活動

3. 小学部で考える ムーブメント教育

	心を育てる (自発性)	
考える力を 育てる(問題 解決)	小学部のム ーブメント	社会性を育 てる(社会性)
	動きを育て る(身体意 識)	

4. 走行ムーブメント (ビデオ紹介)

社会性	時間空間	物の操作
身体意識	走行ムーブ メント	運動の属性
健康	感覚運動	環境適応

5. 国語・算数ムーブメント (ビデオ紹介)

創造	国語科・算 数科の内容	表現
問題解決	国語・算数 ムーブメン ト	社会性
身体意識	知覚運動	環境適応

8/25 15:20~16:40

<講演・実技>

知覚学習パイプによる重度重複障害児から LDまでの支援

横浜国立大学 教授・JAMET顧問 小林 芳文
東京福祉大学 助教授 飯村 敦子

1. 知覚学習パイプについて

紙製のパイプ（頑丈・優しい遊具）

- ・長さ……長、短
- ・太さ……大、中、小
- ・色……赤、青、黄、緑
- ・音をつくる
- ・触る、持つ、転がすなど

2. 知覚運動について

特に、学習の手段として使うための考え方

3. 発達の基礎としての使い方

- ・触覚……触ること、触れること
- ・筋運動覚……動かすこと、転がすこと
- ・前庭感覚……パイプローラーとして

4. 上肢の運動を促す活用

様々な動かし方

- ・音を出しながら腕の運動を促す
- ・転がす
- ・パイプとパイプで音を出す
- ・パイプにロープを通す、そしてその環境を使う

5. パイプを並べる、そしてその風景を使う

様々な並べ方

- ・自由に、間隔をおいて
- ・まっすぐに、曲がって
- ・そのパイプの林を歩く

6. パイプを積み重ねる、その風景を使う

様々な属性によって重ねる

- ・同じ太さで
- ・同じ色で
- ・同じ長さで

7. 発達の応用としての使い方

パイプの幾つかの組み合わせで認知能力を促す

- ・ビーンズバッグと組み合わせて
- ・風船と組み合わせて
- ・スカーフと組み合わせて
- ・フローアーに絵を描く

8. 創造的運動として音楽を作るーパイプを打楽器として使う

集団での共同作品

- ・身近な素材（新聞紙）の組み合わせで
- ・パートを決めて

＜事例報告＞

「MEPAを活用した実践事例」

東京都立小金井養護学校教諭

佐藤 洋子

(1) はじめに

対象としたY君は、知的障害養護学校中学部1年に在籍する生徒である。担任であると同時にグループ学習（国・数／週3コマ）の担当でもある。日常生活、各教科活動の中で、『楽をしたい』（人間誰しもそういう思いは、少なからず持っていると思うが）という行動が顕著に現れるタイプである。ところが、読み、書きを初めとして、持っている力とはともある。自閉的である為のこだわりはキツイ面もあるが、短い見通しなら持つこともでき、簡単な会話も成り立つ。

一番苦手としているのは、身体を動かすことである。毎朝の運動、体育の時は、極力動くまいとしているようにさえ見えてくる。そこで、遊具を使つての動きを試してみたところ、興味関心を持てたようで、日頃見られない動きを引き出すことができた。グループの授業の内容を考えた時、1コマを動きを保障する時間に当てることにした。

(2) 実態把握の方法

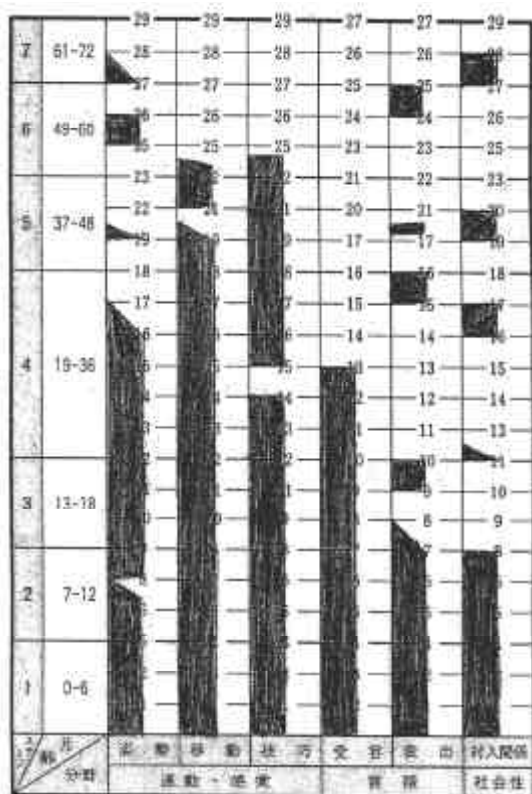
①日常場面での観察

- *自分の興味関心の赴くまま行動しようとする面がある。（やらなければならないことも、さておき）注意を促されると、声を出し不満を露わにする。
- *こちらがきちんと促すとしゃべるが、常日頃は大声を出すことが多い。（家庭においても）自分の思い通りにならないと、大声を挙げる。（CDのかける曲の取り合いなど）
- *毎日の同じ流れであっても、声を掛けないとやろうとしないこともある。
- *運動は、一つひとつを丁寧に介助する必要がある。（毎朝の運動でも、自分からは動かないが、運動の流れは理解している）

②アセスメントからの情報

Y君のMEPAプロフィールは、表1の通りである。

- ※姿勢・移動・技巧……同じ姿勢を保持できない。腹筋力、背筋力に乏しい。
足首等部分的に固いため、なめらかな動きをしにくい。
手指操作に苦手さがみられる。協応動作ができない。
- ※受容・表出……抽象概念がやや難しい面がある。言葉だけの指示には、なかなか行動が伴わない。身近で自分に関わることだと、促すと言葉が出るが、それ以外は日常でもあまり見せない。
- ※対人関係……大人との関係が主である。それも、相手から声を掛けられて反応するが、自分からはない。友達との関わりは薄い。好きなものには固執する面もある。



氏名	Y	性別	男	生年	H1年1月24日生
第1指導	13年7月1日	年齢	周12歳7か月		
第2指導	年 月 日	年齢	周 歳 月		

表 1



(3) 指導の目標の設定

Y君の日常生活やMEPAプロフィール表を参考に、言葉によるコミュニケーション、手操作による運動の促進、『速い・遅い』『前・後ろ』『右・左』『クルクル（まわる）』などの言葉のイメージと動きとの連合能力の育成を柱として、課題を意識できる運動や、創造的運動プログラムを考えていくことにした。

○短期目標

- *友達のやっていることを良く見る。
- *呼ばれたら、すぐに動き出す。

○長期目標

- *自分からやってみようという気持を持つ。
- *自分の身体を、意識的に動かしてみる。
- *目と手、手と足等を協応させて、なめらかに動けるようになる。

(4) 指導の実際

個別の指導計画を作成し、個々人のねらいや課題をグループ学習へどのように反映できるかを検討した。そして、コミュニケーションスキルの拡大を視野に入れ、次の4つの一連の内容を中心に（体育館では、キャスターボード等を使ったダイナミックな動きの内容）指導を展開した。



5. ムーブメント教育での計画と展開

①認知機能を育てる自立活動

②身体健康・動きを育む自立活動

③コミュニケーションを育てる自立活動

④音楽・遊具を活用した自立活動

8/26 11:00～12:00

<講演・実技>

ムーブメント教育による前教科学習

国立特殊教育総合研究所 主任研究官
當島 茂登

1. ムーブメント教育と学習の発達段階

(1) ムーブメント教育と前教科学習

①動きを学習する

②身体や動きを通じた学習（前教科学習）

(2) 学習の発達段階（M. Ebersole, 1983）

①粗大運動

②運動－知覚

③知覚－運動

④知覚－概念

⑤概念

2. 実技：ムーブメント活動の展開（参加者とともに考える）

(1) 感覚運動の学習

(2) 知覚運動の学習

(3) 認知の学習

＜実践報告＞

8/26 13:00～13:30

自立活動の計画と展開

－認知発達を促す自立活動の展開－

千葉県立富里養護学校 教諭
庄司 喜昭

1. はじめに

今回の学習指導要領の改訂で、「養護・訓練」の領域が「自立活動」へと名称変更するとともに、個々の児童・生徒が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服していくための取り組みであることが明らかにされた。また、「自立活動」の指導においては、個別の指導計画の作成が明記されたこともあり、よりきめ細かい実態把握、児童・生徒が主体的に取り組む指導プログラムの必要性が求められてきている。

そして、この報告は千葉県立富里養護学校中学部のA君について、MEPAを中心にした実態把握を行い、ムーブメントの活動を取り入れて楽しく活動する中で、認知発達を促す指導に取り組んだ実践の報告である。

2. 実態把握の方法

(1) 日常場面での観察から

＜生活面、学習面、運動面から＞

- ・机上の学習が苦手である
- ・動作性の課題は比較的得意である
- ・身体が柔らかく、バランス感覚は比較的良い。

(2) アセスメントからの情報

＜MEPAのプロフィール表から＞

- ・運動・感覚分野…第4～第5ステージ
- ・言語分野……………第3ステージ
- ・社会性分野……………第4ステージ

3. 指導の目標の設定

○短期目標

○長期目標

- ・身体意識を高めること、動きや状況に関わる言葉を増やすこと、色に関する理解を深めることなどを目標に設定して取り組んだ。

4. 指導の実際

楽しく活動をする中で、身体意識・言葉・色を意識させながら……

○ムーブメントロープを使って

- ・動的バランス、視知覚能力、目と手、目と足の協応性、身体像、身体の部位の知識を高めるプログラム

○形板を使って

- ・動的バランス、視知覚能力、目と手、目と足の協応性を高めるプログラム

5. まとめ

(1) 活動の様子から

<ムーブメント遊具を用いて>

楽しく活動することで、生徒の意欲を引き出すことができた。
動きを軸にした活動で、生徒にとってわかり易く、取り組み易かった。



学習の成果

<MEPAのアセスメントを生かして>

生徒の全体像を捉え、それを生かした指導計画の作成
適切な指導目標と指導内容の設定

参考文献：小林芳文総編集
小林芳文 他

幼児のためのムーブメント教育実践プログラム
自立活動の計画と展開 1巻
『認知発達を育てる自立活動』

コレール社
明治図書

8/26 13:30～14:00

＜実践報告＞

自立活動の計画と展開

ーコミュニケーションを育てる自立活動の展開ー

鳴門教育大学学校教育学部附属養護学校 小学部教諭
国広 松代

1. はじめに

本校は、小学部18名、中学部18名、高等部27名の児童生徒が在籍する知的障害養護学校である。

本校では、現在「一人一人のニーズに応じたコミュニケーション支援」について、実践研究を進めている。本発表の「思いやりの心を育てるムーブメント活動」も、児童生徒が「人や社会と適切に関わっていく」というコミュニケーション技能の支援の面から行った実践である。

2. 実践

(1) 小学部のムーブメント活動

- ・毎週月、水、木曜日、30分間「リズム運動」を実施
- ・リズム運動の組み立て

床掃除（モップを使用）
ピアノによるリズム運動
（走る、歩く、転がる等の粗大運動中心）
バイオリンによるムーブメント活動
（ムーブメント遊具を使った運動）
自由遊び（教師は担当の児童の記録）

(2) 高等部の生徒の課題とムーブメント活動の有効性

認知発達レベルの高い生徒の中に、社会的相互作用における微妙なニュアンスや状況が読みとれないために、不適切な行動を引き起こす生徒が少なからずいる。そうした生徒に対する援助の方法として、小学部のリズム運動を取り入れることにした。有効性は次のようにとらえた。

- ・自己肯定感を育て、上級生としての役割意識を引き出すことができる。
- ・ムーブメント活動の動き自体は生徒達が十分達成していることなので、個々の社会性の課題そのものに焦点を当てた指導がしやすい。
- ・ことばに頼ることの多い生徒も、音楽や動きを通して、ことばではないコミュニケーションを体験することができる。

(3) 「思いやりの心」に迫るために

社会性に課題を持つ自閉性障害の生徒の心の課題に迫るために、応用行動分析の考えを参考にして実践をした。「相手を思いやる」という心の問題を、それを表す行動の側面からとらえ、できるだけ達成可能な具体的レベルにまでおろして指導する。その具体的な行動がつながって、例えば、「小さい子と関わるときのスクリプト」が形成されれば、自閉性障害の生徒も、人と心地よく楽しめるのではないかと考えた。

(4) 事例

Sさん	高等部1年(女子)
	MEPAプロフィール
運動・感覚分野、言語分野	→ 第7ステージ通過
社会性分野	→ 第5ステージ S-20
	第6ステージ S-26
	第7ステージ S-28、29 未通過

通過している物でも、著しく内容が限定されていたり、一方的だったりする。

- 長期目標
 - ・場面や状況に応じて声の大きさを調節する。
 - ・相手の立場や周りの状況を考えて行動する。
- 短期目標
 - ・小さい子の動きに合わせて自分の動きを変えたり、小さい子の様子を見ながら声をかける。
- 指導場面 小学部リズム運動
「手をつないで走る。」
- 指導手順
 - ①「手をつないで走る」ことの課題分析
 - ②標的行動の決定 → 「相手に合わせて走る」
 - ③ABC分析から、支援の手だてを考える。
 - ・具体的な行動として援助する。
 - 「相手に合わせる」 → 時々相手を見る。 → 笑っていれば走って良い。泣き出しそうであれば、スピードを落とすか、止まる。
 - 相手が動き出すのを待つ
 - 相手が動き出せば、一緒に動く。動き出さないようであれば、ゆっくり手を引く。
 - ・目標を視覚的に明示する。

○指導の結果

Sさんの行動の変化

- ・特定の子を避けることがなくなった。
- ・行動目標を意識して活動できるようになった。
- ・活動中、時々相手を見て、動きを合わそうとする様子が見られる。

3. まとめ

「思いやりの心」を行動として教えていくという試みは今後の新しい方向づけになった。また、異年齢集団で活動するということは、ソーシャルスキルという役割取得の練習の場としても有効であることが分かった。

ピアノやバイオリンといった楽器が有効に働いて、こども達がより一体感を感じながら楽しんで活動ができたことも、子ども達の変化の要因になった。「心を育てる」大きなポイントは「楽しさや喜び」の共有であると思う。認知発達のレベルに関係なく、「心地よい音楽の中で、自分や他者を意識しながら動くこと」が心を育てる事であると改めて実感している。

8/26 15:20~16:20

＜実 技＞

バイオリンによる音楽ムーブメントの展開

鳴門教育大学学校教育学部附属養護学校 教諭
猪子秀太郎

はじめに

動きと音楽が結びついて、心に響くムーブメントが展開されます。それは「今、ここにしかない時間」なのです。会場みなさんと一緒に、その大切な時間を共有したいと思います。みんなで楽しみましょう。

MENU

1. みなさんこんにちは

－バイオリン演奏－

2. バイオリンと一緒に動きましょう

－準備運動－

3. 洗濯ごっこ

－スカーフとロープ－

4. めざせ巨人の星

－荷造りゴム－

5. みんなで合奏

－フープ、その他－

6. パラシュートで遊ぼう

7. 徳島みやげ

8. みんなで歌いましょう

8/26 14:00～15:00

<講 演>

障害児・者のプールにおける実践と効果

水中ムーブメント協会 会長
荒井 正人

Ⅰ. プールの環境

1. 水の中で働く力

浮力・重力・水抵抗力（水圧）・推進力（揚力）

2. 水中運動における生理学的変化

(1) 水温

- ①プールの水温は熱放散率が大きい
- ②動静脈血管拡大
- ③心拍数の減少
- ④筋緊張を低下させる
- ⑤エネルギー消費量大
- ⑥体温の冷却により激しい運動が長時間できる（心臓の負担軽減）

(2) 浮力

- ①身体支持器官への荷重免荷
- ②調整能力訓練に役立つ
- ③体重の重い人にも安全に出来る
- ④筋肉がリラックスする

(3) 抵抗

- ①ウエイトトレーニングが安全に出来る
- ②無限の抵抗負荷が得られる
- ③個人の能力に適した負荷で、筋力の弱い人から強い人まで同時に出来る

(4) 水圧

- ①静脈血還流促進
- ②心肺機能増進に役立つ

2. 効果を上げる指導の流れ

(1) 水面上の場面

姿勢：立位姿勢

ねらい：身体意識の向上（自分自身の身体を知り、使う）

(2) 水面の場面

姿勢：立位姿勢（背の低い子）、しゃがんだ姿勢

ねらい：身体意識の向上（浮力を感じながら自分自身の身体を知り使う）

(3) 水中の場面

姿勢：水中に潜った姿勢

ねらい：身体意識の向上（無重力での自分自身の身体を知り、使う）

(4) 水面の場面

姿勢：水平姿勢（泳法の基本姿勢、伏し浮き・背浮き）

ねらい：泳ぎにつながる身体意識の向上（浮力・推進力の経験）

IV. まとめ

1. プールの環境を把握する。

(1) 更衣室（ロッカー等の使用方法）

(2) シャワー室・トイレ（シャワーは温水か？ トイレは車椅子用が有るか？）

(3) プール及びプールサイド（プールの形状は？ プールサイドは防滑処理されているか？）

(4) プールの水温（活動中笑顔がでる水温か？）

2. 発育発達レベルに合わせた指導プログラムを組み、子どもたちが喜びを感じ、継続できる指導展開を行う。

(1) 発育発達レベルに合わせた、指導体制を組む。

（マンツーマン → 少人数グループ → グループ）

(2) 子どもたち一人一人の発育発達レベルに即応した、段階的（スモールステップ）な指導を展開する。

(3) 水中活動が日常生活に役立つ様な、指導プログラムを組む。

II. プール指導の実践

1. 知的障害児・者のプール指導

幼児期から成人までのビデオを見ながら

2. 肢体不自由児・者のプール指導

幼児期から成人まで（さまざまな障害特性より）のビデオを見ながら

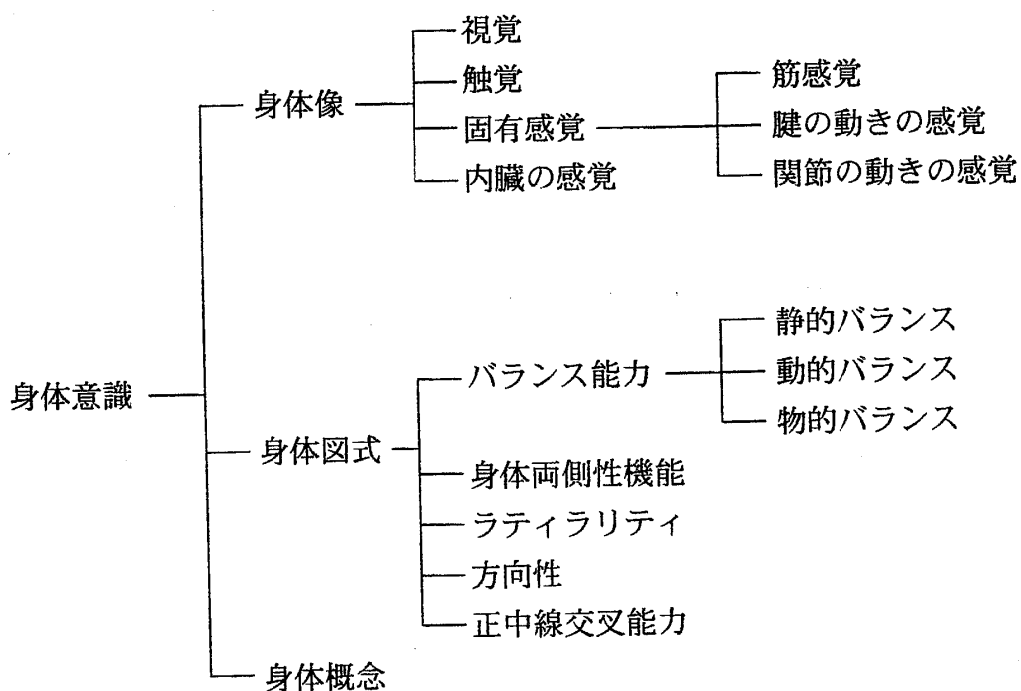
III. 効果を上げるプール指導をするには

1. 子どもの発達を理解する

(1) 正常な順位的発達

中枢神経系の 成熟レベル	これに相当する反 射的発達のレベル	その結果としての 運動発達のレベル
脊髄性および／ または脳幹	無足獸的 原始的反射	腹臥位 背臥位
中脳	四足獸的 立ち直り反射	這う 座る
脳皮質	二足獸的 平行反射	起立 歩行

(2) 身体意識



明日があるさ(ムーブメント編)

1. 明日があるさ 明日がある
若い僕には 夢がある
いつかきっと いつかきっと
わかってくれるだろう
明日がある 明日がある 明日があるさ
2. ふと見た その手に パラシュート
まわりの みんなも つかんでる
振ってみよう 回してみよう
なんだか 楽しいね
明日がある 明日がある 明日があるさ
3. 知らない人が あつまった
いっしょに フープで 遊んだよ
すぐに仲良し すぐに仲良し
仲間に なっちゃった
明日がある 明日がある 明日があるさ
4. おんなじ ボールを 持っても
おんなじ スカーフで 遊んでも
みんな違う みんな違う
だから 楽しいのさ
明日がある 明日がある 明日があるさ
5. ときどき 失敗するけれど
みんなが 助けてくれるのさ
あせることないさ あせることないさ
「わはは」と 笑っちゃおう
明日がある 明日がある 明日があるさ
6. ムーブメントは 楽しいね
みんなの顔が わらってる
明日もやろう あさってもやろう
毎日やっちゃおう
明日もある あさってもある 毎日あるさ
明日もある あさってもある 毎日あるさ

日本ムーブメント教育・療法協会

〒144-0056 東京都大田区西六郷 4-20-6
社会福祉法人行道福祉会内



TEL 03-3738-1094

FAX 03-3738-1172

Japan Association of Movement Education & Therapy
(略称 : JAMET)

公認ホームページ <http://www.asahi-net.or.jp/~NE8M-TKHS>